

食物連鎖

伊藤帆乃香

全身に鳥肌が立つほどの寒さが、私の脳内回路を繋げたようだった。眠りを装ったまま手探りで毛布を探しても、何やら重い物体が載っていて動かない。おそらくその物体以上に重たい臉を必死にこじ開けると、パンダに似た白いTシャツの背中が毛布にひしとしがみついていた。太一だ。彼はいつも薄着で、そのくせ年中エアコンを消して眠ることががない。だからこの寝室は真夏になるほど寒く、真冬になるほど暑くなる。同棲を始めてから一年が経ったが、それだけは未だに慣れない。

寝室を出ると、いくらか熱を帯びた空気がまとわりつく。最近の私の楽しみは、毎朝この空気を浴びながら彼のペットに餌をやることだ。私は棚から、この間枯れた向日葵の種が入ったフィルムケースを取り出した。枯れたときに彼が「せめて種だけはとっておきたい」と集めたものだ。ちなみに隣には、彼が昔付き合っていた女の写真や、デートに行った場所のチケットが入った缶がある。私はフィルムケースを持って、ハムスターのケージに向かった。

たときのことだ。

「人生のほんの一瞬も無駄にしたくないから」

太一はそう答えた。絵より楽に表現できるから、という安易な動機でサークルに入った私は、身体に電流が通ったかと思うほどの衝撃を受けた。

太一は人生の無駄な部分を含めたすべてを、本当に大切にしている人なのだ。だから彼は絶対に私を捨てない。たとえ別れたとしても、だ。その確信が、いつしか恋人になつてからも私の愛情を支えていた。

それから間もないある日のこと。私は空になったフィルムケースの隣に、真新しい缶を見つけた。黒いマジックで書かれた「さくら」の文字、見知らぬ女の写真。

「やっぱり二股をかけてたのね。どうして？ 私と別れてからその子と付き合えばよかったじゃない」

そう言うと、彼は素直に頷き、そして言った。

「そうだけだ。せつかくふたりとも俺の傍にいてくれているのに、どちらかを捨てるなんて俺にはできないよ」

ああ、そうだった。私は今更納得した。彼は私から突き放さない限り、私を捨てない。短くなった鉛筆を、まだ使えるからといつまでもとっておく子どものように。

そして私は気付いた。そんな「絶対に捨てられない」恋愛に、自分自身が飽き飽きしていることに。だからこちら

「ミュ、ご飯よ」

ハムスターのミュは、愛嬌たっぷりに向日葵の種を食す。私も思わず微笑む。日向子が由美に食べられている、と。

日向子も由美も、太一が昔付き合っていた女だ。缶に写真も入っている。男は過去の恋人を「名前をつけて保存」するとはよく言ったものだ。向日葵は日向子の、ミュは由美の身代わりだろう。もちろん、私の推測と言ってしまうばそれまでだが。

フィルムケースを元の場所に戻したとき、太一が部屋に入ってきた。

「百合、おはよう」

そうぶつきらぼうに告げる顔は、お世辞にも美男子とは言えない。それでも私は身体の奥から溢れだす何かを背中を押されて、彼に抱きつく。

「ミュもおはよう」

ハムスターの方に行こうとする太一を押し留め、

「もう餌はあげておいたから」

最近減りの悪いハムスターフードと、あと一つしか種の残っていないフィルムケース。気づかれないように腕の力を強めると、少しだけ彼の寝起きの体臭が鼻についた。

きっと私は彼の捨てられない性分に惚れたのだと思う。

大学の写真サークルで出会った彼に、何故撮るのかを聞い

から捨てることにした。

私はさつさと実家に帰り、彼との思い出の品を処分した。

彼からは「さくらとは別れた」というメールが来たが、見ないふりをした。そして、何もかも脱ぎ捨てた身体を自分の肌に乗った温度の寝室に横たえ、眠りに落ちていった。

寒いわけでもないのに、全身に鳥肌が立っているような感覚がして、私の脳内回路は繋がった。重たい臉を開いてすぐ、私はそれが恐怖から来るものだったことを知った。

目の前には鉄格子が立ち並んでいる。足元はぶらんこのように吊り下げられた一本の木の棒があるのみだ。でも不思議と不安定な感覚はしなかった。どうやら私は鳥籠の中にいるらしい。とにかく出口を見つけようと視線を巡らせて、私はぎよっとした。鳥籠の扉を、見知らぬ猫がこじ開けようとしている。それも、人間のように器用な手つきで。私は焦って、籠の中を必死に飛び回った。

鳥籠の外に視界を巡らすと、ハムスターのケージが飛び込んできた。扉は開け放たれ、中には何もいない。もしや、と猫の顔を盗み見ると、口元の毛が赤く染まっていた。

がしゃん、と大きな音を立て、ケージの扉が開いた。私は目をぎゅっと瞑って全身に力を込める。そのとき、昨日別れたはずの太一の声がした。

「おはよう、チェリー。リリーもおはよう」